Riverbed Cafe

hiro2001

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｒｉｖｅｒｂｅｄ　Ｃａｆｅ

【Ｎコード】
Ｎ８２０５Ｃ

【作者名】
ｈｉｒｏ２００１

【あらすじ】
８月最後の暑い日に、偶然耳に入ったあの曲が、１０年以上前の僕の記憶を呼び覚ました。１９９３年のあの夏、大学４年生だった僕と彼女たち、彼らとの出会いが、人生のターニングポイントとなった。ｃｌａｓｓの曲とともに今鮮やかに蘇る、河原のカフェに集う僕らの、懐かしくもほろ苦い青春群像物語です。

プロローグ

その日の僕は、いや僕の乗った自転車も含めて快調だった。懸案だった仕事もようやく終わり、平日ではあったが久しぶりの休みを取った。夕べの打ち上げで飲み過ぎたにもかかわらず、もたれているはずの胃も意外とすっきりしていた。それにしても、自分の住むアパートの近くに、こんなのどかな河原が広がっていたなんて全く知らなかった。もちろん、現実としての川の存在は十分過ぎるほどにわかっていたが、感覚的にうまく把握されていなかったのだ。そのせいもあってか、目に映るもの全てが真っ白なキャンバスのように新鮮だった。足元のサイクリングロードは、中央に点在する白線を道標に河原を突き抜けて一直線に伸び、遠く陽炎の彼方に霞む鉄橋へと消えていた。首を上げて空を仰ぎ見ると、そこにはこれからさらに輝きを増すであろう太陽が君臨し、八月最終日の午前中を見事なまでの残暑にしていた。身にまとうVネックの白いTシャツは、滲み出る汗で肌にまとわりついていたが、僕はそんなことなど気にもならなかった。三十歳をはるかに過ぎてなお部屋でのストレッチだけは欠かさない僕の体は、確かに同年代と比べても瑞々しさを保っていたが、この心地よさはそのためでも、また頬を撫でる意外に爽やかな風のせいでもなかった。これから向かう先に、実に数ヶ月ぶりに訪れるお気に入りのあの場所が横たわっているからだ。

視線を数メートル先に戻すと、そこには近所の奥様方と思われる四人組が小さく固まって井戸端会議をしていて、傍らでは五人の子供たちが、これまた小さく固まって座り込んでいた。取り立てて何の変哲もない光景だったが、でも僕は子供たちの手元に光る何かが妙に気になった。

だから、急ぐ旅でもないのをいいことにその場に自転車を置くと、同年代に見える彼女たちのほうではない、もうひとつのささやかな輪の中に入っていった。

「こんな時間に、どうして花火なんかやってるの？」
子供たちの手には今の時間帯にも、また周囲の白さにも相応しくない線香花火が握られていた。かなり前からやっていたらしく、足元にはピンクと黄色と灰色に染められた残骸が無造作に放置されていた。
「おうちに残ってたの。前に海に行ったときに買ったの」
何気ないその言葉に不自然に反応する自分がいた。いや、言葉にではなかった。僕の脳裏を過ぎったのはその点景だった。光景という面ではなく点なのだ。それは間違いなく、記憶の片隅にある点と結びつき、おぼろげながらも一本の線を形成していた。でも僕の思考は、そこでぷつりと切れてしまった。線が面となって広がりを見せなかったのだ。だからもどかしかった。喉元まできていながら出てこない歯痒さを感じるしかなかった。
僕はそこに、子供たちと記憶の断片を残したまま再び自転車に跨った。久しぶりの、何よりせっかくの貴重な休日なのだ。変な考えごとに時間を費やすのはやめて、降り注ぐ太陽の光に身を委ねようと思った。何はともあれ、僕は前に向かって進んでいかなければならないのだから。

僕のお気に入りの場所は、そうしてサイクリングロードを十分ほど走り、さらに雑然とした路地を通り抜けた果てに忽然と現れた。そこは町の西に位置する駅に程近い場所にあったが、駅と近くを走る国道周辺のごくわずかな地域を除いては閑静な住宅街が広がり、遠くからかすかにピアノを弾く音が聞こえた。東京郊外にある典型的な光景がそこにあった。
くるくると回る赤白青三色の目印を横目に引き戸を開けると床屋独特の香りがほのかに漂い、目の前に左右対称にある三脚ずつの黒い椅子と鏡のセットと見事に調和していた。僕はここに立つ久しぶりの感覚にすっかり頬が緩み、自分を席に促す店員の声も耳に入らずにその場に佇んでいた。やっとここに来られた、これで何もかも

忘れてすっきり気持ちよくなれると思いながら。
「ずいぶんと久しぶりですね。いつもと同じ感じでいいですか？」
おそらくパソコンの顧客データで見てきたのであろう、僕より十歳以上は年下に見える茶髪の男は、いかにもの営業スマイルを浮かべながらこちらに話しかけてきた。自分が店員だったら、やっぱりこんな風に微笑むだろうなと奇妙な同情をしながら軽く頷くと、彼は腰から素早くハサミを取り出して、早速僕の髪を切り始めた。相変わらず今日も暑いですね、などとありきたりの世間話を始めるその姿にさらに同情しながらも、眼前に広がる鏡越しの世界を覗き込んでみると、切り取られた長方形の空間に僕以外の客は誰もいなかった。閑散とした空間には、手持ち無沙汰ながらうんざりした表情で外を眺める男が一人と、ひそひそと話をしながら規則的に笑い合う男二人と女一人、それだけだった。客よりも理容師のほうがはるかに多いこの状況は、でも僕を不思議なまでに安堵させた。当然のことながら僕は、彼らの仕事仲間でも、ましてや友達でもなかった。全くの部外者で赤の他人だった。そして同時に、彼らから一身にサービスを受けるべき唯一の存在だった。何の遠慮も気配りもいらなかった。だから好きなのだ。この日を待ちわびていたのだ。全方位に心が開放されるこの瞬間を。
頭の隅のほうから音楽が聞こえてきた。突然だと思ったが、どうやら単に気づくのが遅かっただけのようだった。始めのうちはバラードのようにゆっくりと静かに聞こえていたが、次第に音が大きく聞こえてくるにつれて、それははるか前に耳にしたある曲と結びついた。
「この曲は……」
僕の突然の問いかけに驚いたのか、彼はしばらくの間ハサミを止めて鏡越しにこちらを眺めていたが、すぐに営業スマイルを取り戻すと流れるような口調で答えた。
「さあ、自分はよく知らない曲ですが」
「夏の日の１９９３だよ、そうだよ」

長方形の空間越しにきょとんとした彼の顔が見えたが、僕は何よりもその音楽によって開かれた世界に懐かしさが込み上げ、やがてそれはとめどなく湧き出る切ない想いに変わっていった。十一年前のあの夏は、今と同じように暑かった。むせぶような風の匂いや気だるい昼下がりも変わらなかった。ただひとつ違ったのは、僕の胸に隙間なく宿っていた熱い想いだった。まだ何も描かれていない、狂おしいまでに輝く真っ白な世界だった。

Rest 1 ―Part. 1―

一九九三年の僕は、少なくとも外見上は今とほとんど変わらなかった。でも、一皮向けばその中身はどうしようもないまでに大学四年生だった。今のように心を分厚く覆う硬い殻もなく、意に反した言葉の数々を発することもなかった。良かれ悪しかれ何もかもがありのままの自然体だった。

僕の人生の転機ともなったその夏を語るには、でもさらに数ヶ月前の二月に遡って話さなければならないだろう。大学生に特有のひたすらに無味乾燥な春休みに突入したばかりの僕は、その退屈さと金欠状態を解消すべくバイトの口を探していた。都心から少し離れた地元のこの町では、何よりも新聞に折込まれている求人広告が役立つはずだったが、意外にもフロムAから「オープニング・スタッフ募集」の文字を見つけた僕は、その店が経験したことのない弁当屋であったことよりも、新しい店で人間関係の煩わしさがないことを理由に面接を受けることにした。

三日後に店を訪れた僕は、新装開店の準備で足の踏み場もない厨房で店長と初めて顔を合わせた。自分よりいくつかだけ年上に見えるその男は、ぼさぼさの茶髪を無造作にいじりながら履歴書をちらっと見ただけで採用を決定してしまった。あまりのあっけなさに拍子抜けしたが、考えてみればいつ辞めてもおかしくない学生のバイトを選ぶのに特段の基準があるわけもないのだろうと妙に納得しながら、とにかく一週間後のオープン当日には遅れないようにとの言葉を背に、痺れるほど寒い風の舞う舗道に出た。

そうして、わけもわからないままにオープン当日の午前十時から店のレジの前に立ったが、最初の一時間半とその後の二時間とでは客足に極端の差があった。店長から簡単にレジ打ちを教わってしばらくは客もほとんどなく、これなら楽勝だろうと昼飯にどの弁当を食べようかと頭を巡らせているうちに悲劇は訪れた。正午へのカウ

ントダウンが始まるにつれて次第にフロアを埋め尽くしていく人の群れは、程なくバーゲン会場の様相を呈し始めた。厨房から厳しい口調で檄を飛ばす店長の声も理解できず、僕を含めた三人のバイトはただやみくもにレジを打ち温かい弁当をビニール袋に詰めた。それはまさに、戦場と呼ぶに相応しい光景だった。何も考えられずに頭の中が真っ白になり、反射神経で手足だけが動いている状況だった。だから、ようやく昼の弁当にありついた頃には脱力感が体全体を覆い、一刻も早く家で横になりたい衝動に駆られた。

でも、人間の体は不思議なもので、行動が習慣となって日常生活に組み込まれていくにつれて、疲労の度合いも次第に少なくなっていった。三月を過ぎて四月に入った頃には、厨房での弁当作りもすっかりマスターし、手の抜きどころもわかるようになっていた。

店のシフトは、開店から夕方までと、夕方から夜の十時までの二つに大別され、僕は昼のシフトに入っていたのだが、パートのおばさんたちの世間話や仲間同士の確執にうんざりしたこともあって、程なく夜のシフトに移ることにした。女子高生や女子大生のバイトが多いこの時間帯は僕にとって望むところだったが、あまりに出入りが激しかったこともあって、しばらくは誰が誰だかよくわからないような状況が続いた。

そんな中にあって僕は、二人の男と仕事を共にすることが多かった。二人とも大学生で年下だったが、僕はそのうちの一人と話が合い、やがて友達のように打ち解けた間柄になった。彼はこの四月から大学生になったばかりで、店からバイクで十分ほどのアパートで一人暮らしをしていた。建築を専攻していた彼は、また大学のゴルフ部にも所属し、忙しい毎日を送っていたが、同じく就職活動で身の回りが忙しくなり始めていた僕にとって、何より彼との会話がとても楽しみになっていた。取り立てて面白い話題で盛り上がっているわけではないのだが、体育会系でさっぱりとした性格から発せられる歯切れのいい言葉の数々が、文科系の仲間だけに囲まれた僕にとって新鮮に映ったのかもしれなかった。また、話の中に垣間見え

る彼の意外にも大人びた考え方に触れていくにつれて、年下にもかかわらず僕は彼に対して友情のような感情すら抱き始めていった。

Rest 1 ―Part. 2―

「斉藤さん、知ってましたか？　もうすぐここでバイトの面接をやるみたいですよ」
「へえ、そうなんだ」
「しかも若い女の子が三人ですよ」
「何でそんなこと知ってるんだ？」
「さっき店長が言ってたんですよ。にやにやしながら」
　その夜も僕は、彼……金井と同じシフトに入ってバイトをしていた。ゴールデンウィークも終わった五月半ばに客足は途切れがちで、僕らは暇にまかせて厨房のシンクに並んでもたれかかり、目の前に佇む大型の炊飯器の存在を確かめていた。その中にはまだかなりの飯が入っていたが、かといってそれを食べる気は全くしなかった。昼に食べたカツカレーのせいかもしれなかった。
「可愛い子だといいですね」
「まあ、あまり期待しないようにしようぜ。ほら、合コンなんかでもよくあるだろ？　息せき切って店に行ったのにがっかりみたいな」
「でも、やっぱり期待しますよ。あっ、来ましたよ。あの子たちじゃないですか？」
　金井の大学一年生的な初々しい言動と反応をどこか羨ましく見ながら、僕も自動ドアから店内に入ってきた女の子たちの姿を眺めた。
「すみませーん、バイトの面接に来たんですけど」
「はいっ」
　でも、よそ行きがかった緊張気味の声を残してカウンターに出て行く金井の後ろ姿越しに見えた彼女たちは、彼の期待通りの、いや僕の期待をもはるかに上回っていた。連れ立ってきたところを見ると友達同士なのだろうが、一人はストレートの黒髪が長く伸びる切れ長の目をした大人しめの、もう一人は肩にかからない程度のウェーブがかった褐色の髪と目尻が少し上がった猫目の活発そうな子だ

った。タイプこそ違っていたが、可愛いという重要な一点をもって二人は見事に共通していた。
「さあさあ、どうぞ。店長は奥の部屋にいますから」
金井の後に続いて厨房に入ってきた彼女たちは、周囲に全く相応しくない香りを風に伝えながら僕のすぐそばを掠めていった。もっとも、その瞬間に目配せをした金井の緩んだ頬も妙に印象的だったが。
「自分が言ったとおりじゃないですか。信じるものは救われるんですよ」
「それって、何かちょっと違うような気もするけど」
「まあ、細かいことはいいじゃないですか。これから楽しいバイト生活になることだけは確かなんですから」
奥の部屋から戻ってきた金井は心の底から嬉しそうだった。その証拠に、声がいつもより数段上ずっていた。もとより、可愛いバイト仲間の出現に僕も嬉しくないはずはなかった。オープン当初こそ数多くいた女の子たちも、三ヶ月を経た今となっては女子高生を数人残してほとんど辞めてしまっていたからだ。金井と二人で他愛ない話をするのも楽しかったが、何より僕らは純粋かつ不純に女の子と触れ合う機会を欲していた。特に僕は、同い年の大学の同級生ではない、年下の可愛い女の子を漠然と求めていた。だから、年下の金井の目の前では表せなかったが、内心では小躍りしたいほどに胸が高鳴っていたのだ。

三人目のバイト希望者が訪れたのは、それから小一時間が過ぎた頃だった。つい先ほどまでの興奮状態もようやく収まりかけた、そんな時に彼女は僕の目の前に立っていた。始めはお客さんと間違えて、思い切り「いらっしゃいませ！」と叫びながらカウンターに出てしまったが、「あの、客じゃないんですけど」の無愛想な一言で僕はようやく気がついて、中に入れるようにレジ脇の引き戸を開けた。

端的に言えば、彼女は僕よりはるかに背が低かった。カウンターの中は外よりも二十センチほど高かったが、それを割り引いても彼女はこぢんまりとしていた。それだけが彼女に対する印象だった。どこにでもいそうな、自己主張の強い友達がいるとその陰に隠れてしまうような地味な女の子だった。

「ちょっと、レベルダウンですかね」

「おい、聞こえるだろ」

金井の率直な感想に、僕は奥の部屋のドアが開いていることを気にしながらも、そのとおりだと心の中で深く頷いた。確かに、街中での絶対的評価で見れば彼女はむしろ平均以上かもしれなかった。でも、三人の中で相対的に見れば、また違う見方もできた。さらに運が悪かったのは、彼女が最後に現れたことだった。もしも最初に現れていたら、とりあえずとはいえ僕らの見方もまた変わっただろう。

いずれにしても、彼女たちが僕らと同じ立場になることは間違いなかった。人手不足だったこともさることながら、女好きの店長が三人全員を採用するのは火を見るより明らかだった。若い女の子なら誰でも幅広く受け入れる店長の懐の深さを、僕らはこの数ヶ月で経験的によく知っていたからだ。

その翌週から、僕らは予想どおり彼女たち三人と仕事を共にすることになった。夜の時間帯は通常二人体制だったが、当分の間は僕と金井ともう一人の男……島本の中から二人と、女の子一人の三人でシフトに入ることに決まった。昼間はともかく、夜に関しては開店当初の客足は見る影もなくなっていたので、僕は彼女たちと厨房のシンクにもたれながら、日替わりメニューを捲るように会話を楽しんだ。大学のサークルで年下の女の子と接する機会は多かったが、同じ大学という点で立場は同じで、その意味からも違う学校や境遇の子と話せることにある種の新鮮さを感じていた。もちろん、三人のレベルの高さが相乗効果をもたらしていたことも否めなかったが。始めのうちは緊張していた金井もすぐに打ち解け、数日後には彼女

たちとの会話に大はしゃぎしていたことは言うまでもない。

Rest 1 ―Part. 3―

「どう、そろそろここの仕事にも慣れてきたんじゃない？」
「うん、まあね。私、結構このバイト合ってるかも」
その夜も僕は、客が来ないのをいいことに彼女……真美との会話にかなりの時間を費やしていた。三人の女の子の中でたまたま同じシフトに入ることが多かったからか、あるいは金井が放ったレベルダウンという言葉に同調してしまったことへの負い目からかわからなかったが、いずれにしても僕は、真美と最もフランクな付き合いができそうな印象を持った。僕自身の背もさほど高くなかったからか、今となっては彼女の背の低さも全く気にならなかった。勝手に地味だと決め付けた印象も実は全く間違っていて、都心にある短大に通う一年生の彼女は、短めの黒い髪に象徴されるスポーツ好きの、むしろボーイッシュな雰囲気を醸し出す子だった。地味に映ったのは、単にその時着ていた紺のツーピースのせいだったのだ。梅雨入りしたばかりで水気の多い陰鬱な店の外とは異なり、明るく照らされる厨房の中は異世界にいるかのような錯覚を覚える空間だった。
「そろそろ閉店だな。ちょっとレジの金をチェックしてくるよ」
僕と真美が仕事もそっちのけで話をしている間も、マイペースで厨房を片付けていた島本がぼそっと呟いてカウンターに出て行った。すると、真美がすかさず僕の耳元でささやいた。
「私、どうも苦手なの。島本くん、何かとっつきにくいのよね」
「そうかな。いい奴だぜ、アイツ」
そうは言ってみたものの、確かに真美の言い分にも一理あった。僕より二十センチは背が高くほっそりとした島本は、やや病的に見える端正な顔立ちのままに無口で愛想がなかった。必要なこと以外は一切話さず、特に女の子たちと口をきくことは皆無だった。僕自身も、彼が二つ下の大学二年生である事実以外は何も知らなかった。二人でシフトに入っていた時はただ黙々と、お互いに仕事をこなす

だけだった。でも一方で、彼が十分過ぎるほどに優しい人間であることもまたわかっていた。押し付けがましくないさりげない気配りも随所に見受けられた。だから余計にもどかしかった。彼に一言言ってやりたかった。それじゃ、もったいないぜと。もっと面白く生きようと。どう考えても彼は、全体的に繊細に過ぎることで人生を損しているはずなのだ。余計なお世話かもしれなかったが、僕はそんな島本の心に触れ、その未知の部分に足を踏み入れたかった。そう、僕は単純に彼と友達になりたかったのだ。

バイトが終わって裏口から店の外に出る瞬間が好きだった。季節がら今はじめじめとした空気が体にまとわりついてくるが、街路樹をほのかに揺らすさっぱりとした夜風が肌に触れる五月頃は、体と同時に心までもが開放される淡い喜びに満たされたものだった。

「雨、止んだみたいだな」

「日頃の行いがいいからね」

「誰の？」

「もちろん、私のよ」

僕らは自転車を二つ並べて風を切っていた。確かに雨は上がっていたが、路上のアスファルトにはまだその跡が残っていて、車輪を水溜りに入れるたびにしぶきが踊った。隣を走る真美のノースリーブの青さだけが暗闇に浮かび上がっていた。

「何か、こういうのいいわね」

「えっ？」

「夜のサイクリング」

「じゃあ、このまま河原まで走るか？」

二人の家とは方角が違うことを承知で、僕はいつも曲がる交差点を直進した。橋までは五分とかからなかった。僕らはその袂で川沿いのサイクリングロードに入ると、自動販売機の光が煌々とあたりを照らす場所で自転車を止めた。

「さて、ジュースでも飲むか？」

真美の返事を聞くまでもなく、僕は販売機ではちみつレモンを二本買った。河原の斜面に並んで腰を下ろすと、瑞々しいふんわりとした感触に包まれた。
「まだ草が濡れてるな」
「いいじゃない、どうせ家に帰るだけなんだから」
真美の首筋からは、ほのかに甘い香りがした。雨に濡れた草の匂いと相まって、それはむせぶほど生々しく僕の鼻をくすぐった。どこからか救急車のサイレンが聞こえてきた。
「ねえ、こうしていると、仲のいい二人連れに見えるかな？」
「さあ、どうかな。身寄りもなく彷徨う兄妹に見えるかもよ」
「どうしてそういうこと言うかな」
「半分は冗談だよ」
「じゃあ、残りの半分は本気？」
「冗談半分だっていうことだよ」
「全く、やっぱり俊介くんて変わってるわね」
「それはお互いさまだろ。だからこそ二人でこうしているんじゃないか」
真美は、僕の放った言葉の意味を確かめるようにしばらくうつむいていたが、やがて諦めたように首をゆっくりと横に振ると、正面に漂っているはずの水面へと目を向けた。引き込まれそうな闇のはるか向こうに何かを探すように、彼女の視線は直線的に貫かれていた。
「時々、どうしようもなく不安になるの。たった一人で底なしの井戸に落ちたみたいに」
「誰にでもそういう時はあるよ」
「ううん、そういうのとは違うの。もっとこう、絶対的なものなの」
「何か嫌なことでもあったのか？　だったら話してみなよ。力になれないかもしれないけど、外に吐き出しただけでも気分がよくなるぜ」
でも、真美の言葉はそれ以上具体的にならなかった。軽い沈黙と

草の上を這う風だけが流れていた。
「やっぱり、俊介くんていい人ね」
「やめてくれよ。男にとっていい人っていうのは、嫌いって言われるより傷つくんだぜ」
「そうなの？　私はそういう意味で言ったんじゃないけど」
それきり、僕らの間には会話が成立しなかった。真美が心の奥底に大きな闇を抱えていることはわかったが、かといってそれが一体何なのかは結局わからなかった。と同時に僕は、彼女の想いから発せられたベクトルの存在にも気づいていた。ただそれが、どの程度の大きさとレベルをもってこちらに向けられているのかがわからなかった。だからそれ以上先に踏み込めなかった。いや、踏み込まなかったのだ。自分のベクトルがどこに向いているのかさえわからないのだから。

Rest 1 ―Part. 4―

翌日は珍しく青空が広がったが、僕の心はそれとは無関係に陰鬱だった。梅雨時のじめじめ感に真夏並みの暑さが加わって、リクルートスーツ姿の僕はネクタイを緩めることさえできずにあてのない会社回りを続けていた。就職活動はいよいよ最終局面を迎えていたが、昨年までは内定が取れていたであろうこの時期に、周囲で活動に終止符を打った者は稀だった。だから僕は、そりゃないぜのため息とともにビルの谷間を彷徨い歩くしかなかった。何とかしなければといった焦りだけが体を支えていた。

そのままの姿で夜のシフトに入るべく店に顔を出すと、既に来ていた金井と猫目の女の子……玲奈が大声を張り上げて笑い合っていた。何がそんなに楽しいのだろうと、少しうんざりしながらも奥のロッカーで着替えて厨房に出ると、すかさず金井が声を上ずらせながら話しかけてきた。

「就職活動ご苦労様です。外は暑かったんじゃないですか？　何かジュースでも飲みますか？」

「いいな、大学生は。お気楽で」

「自分だってそうじゃないですか」

「いや、そういう意味で言ったんじゃないんだけど」

でも金井は、そんな僕の言葉など聞いていなかった。さっきまでの光景さながら、玲奈と再びおしゃべりを始めたのだ。僕は半ば呆れながら、いやそれを通り越した微笑ましさすら感じながら、レジの金をチェックするためにカウンターに出た。相変わらず客が来る気配はなく、金井に言われたからか猛烈に喉の渇きを感じた僕は、容赦なく西日の当たる店の前の自動販売機でコーラを買って一気に飲み干した。喉にあたる炭酸の刺すような痛みが心地よかった。今夜は店の余りもので何を作って食べようかと、そんな下らないことを考えながら、通りを行き交う車の流れを漠然と追いかけていた。

金井から予想どおりのコメントを聞いたのは、玲奈がトイレに行っている五分ほどの間だった。途端に神妙な面持ちになったかと思うと、二人しかいないにもかかわらず僕にそっと耳打ちした。
「俺、彼女に自分の気持ちを伝えようかと思ってるんです」
「そうか」
「そうかって、他に何か気の利いた言葉とかないんですか？　頑張れよとか、応援してるぞとか。先輩なんだから、もっとアドバイスとかしてくださいよ」
「じゃあ、店が終わってからみんなで飲みにでも行くか？　酔った勢いじゃないけど、普通に働いてるより、よっぽどチャンスがあるはずだから」
「マジですか？　ありがとうございます。さすがは先輩だ。あっ、でも、何か後ろめたい気がするな」
「嫌ならいいんだぜ。無理にとは言わないから」
「あっ、いや、ぜひお願いします」
とってつけたような金井の慌てた表情におかしさが込み上げてきたが、ともあれみんなで飲むのも楽しいだろうと、僕はコントを見る観客のような気分で戻ってきた玲奈と金井を見比べた。でも同時に、気楽で第三者的な感覚に秋風が吹き抜けたような寂しい想いを抱いてもいた。主役はあくまで金井だった。僕はあくまでプロデューサーに過ぎなかったのだ。それがほのかに哀しかった。
でも僕は、なかなか金井との約束を果たすことができなかった。ほとんど悪あがき状態になってきた就職活動の忙しさもあったが、何より自分自身が主役でないことにどうにもやる気がおきなかったのだ。人の幸せをお膳立てしている場合ではなかった。どんな会社でもいいから、とにかくひとつ内定を取ることだけで頭が一杯だった。だから金井に申し訳ないと思いながらも、降りしきる六月の雨粒のようにあてもなく日々を流れ続けるしかなかった。

Rest 2 ―Part. 1―

七月に入ると、暑い夏の到来とともに二つの出来事が唐突に訪れた。ひとつは僕の内定が取れたこと、もうひとつは新しいバイト仲間ができたことだった。前者はただ自分の執念の賜物だったが、後者については当然のことながら偶然のなせる業だった。この間とは違って面接の状況を知ることはできなかったが、初めて目の前で紹介された彼女は、印象が薄いという意味で逆に印象的だった。他の三人の子と比べても、その差は歴然としていた。肩にかからない程度の黒い髪は、小ぶりな顔とのバランスから言えば幾分重い感じがした。一重の瞳は緊張しているためか一メートル先の床に向けられていた。センスのない店のTシャツを着ていたことも相まって、彼女は外見も内面も内気で大人しく映った。でも逆に、それはある意味で新鮮な感動だった。この時代にこういう女の子がいた事実が、いやこういう女の子と出会えたことに目から鱗が落ちる思いだった。だから僕は、バイトのメンバーの中で最年長ということもあり、彼女に積極的に仕事を教えながら次第に話の輪を深めていった。

彼女は名前を潤子といい、音楽関係の専門学校に通っていた。この間二十歳になったばかりと言ったが、僕はそれよりも彼女が音楽をやっている事実にうまく馴染めなかった。外見から醸し出される雰囲気と少なからずギャップがあったのだ。もっとも、よく話してみると彼女は決して大人しくなかった。良くも悪くも極めて普通で現代的だった。

「音楽って、ピアノとかやってるの？」

「そんな風に見えますか？」

潤子の表情は明らかに曇っていた。いや、むしろ苛立ちを隠しているようにさえ見えたので、僕はとっさにその場を取り繕うだけで精一杯だった。

「あっ、いや、別に深い意味はないんだけどさ」

「ボーカルのレッスンをしてるんです。ピアノで作曲もしますけど」
「へえ、じゃあカラオケとかもうまいんだろうね」
言った瞬間にしまったと思った。本格的に音楽の道を歩んでいる潤子に対して、こともあろうにカラオケごときと同じレベルで話してしまったことを深く悔いた。でも、彼女が次に放った言葉は意外なものだった。
「ええ、もちろん大好きです。友達としょっちゅう行ってますよ」
「本当に？　じゃあ今度、バイトのみんなと一緒にカラオケ行こうか？」
「いいですね、ぜひお願いします」
社交辞令ではなさそうな潤子の笑顔にほっと胸を撫で下ろしながら、僕はこれを機会に金井との忘れ去られたあの約束を実行しようと思った。最初にみんなで酒でも飲んで、後は金井次第ということで、うまくいけば玲奈と二人で消えてもらえばいいのだ。僕は他のみんなとゆっくりとカラオケを楽しむ……それで何もかもがうまくいくのだ。要はそれぞれが自分の目的で動けばいいのだから。

意外にもというか当然というか、それぞれの予定がうまく合わなかったこともあって、そのイベントが実行されたのは半月以上経った七月の終わりだった。その日のシフトに入っていた僕と潤子のもとに他のメンバーが集まってきたのは、閉店後の片付けも終わった午後十時半頃だった。金井と島本、それに真美や玲奈を含めた総勢六人は、むせぶような暑さの中を近くの駅まで歩いた。心地よい風が吹くはずもなく、僕はただ冷えた生ビールが飲みたい一心で、安さだけが取り柄の駅前の居酒屋に向かった。
それなりにさらっと席が埋まっている店の片隅に陣取った僕らは、さっそくそれぞれの飲み物を注文して乾杯したが、空腹で飲んだビールのせいか、あるいは珍しく店が忙しかったことで疲れていたせいか、かなりの勢いで酔いが回り、自分のことはともかく周りの状況については全く把握できなかった。もちろん、金井と玲奈がどう

なったのかもわからなかった。でも、次に行ったカラオケの場に二人ともいなかったことを考えると、結果はともかく少なくとも金井の目的は達成されたのだと思い安堵した。もっとも、僕はと言えば満足に歌うこともできず、ひたすらプロ並みの潤子の歌を聞き続けるにとどまったのだが。

Rest 2 ―Part. 2―

「まあ、カラオケも盛り上がってよかったよな」
「全く、途中から寝てたくせによくもそんなことが言えるわね」
その時、僕と真美はいつもの河原で新しい一日の始まりを待っていた。明け方まで続いたカラオケの後はどことなく物憂げだった。一ヶ月前に初めて来て以来、僕らはバイトから帰る道すがら、よくこの場所に立ち寄ってはあてもなくジュースやコーヒーを飲み続けた。ある時彼女が、「まるで天然のオープン・カフェみたい」と言ったことがきっかけとなって、僕らは缶のドリンクしかメニューのない「河原のカフェ」と呼んでいた。
「でも、この時間にここにいるのって初めてだな」
「確かにそうね。何だか新鮮な感じ」
東の空から太陽が昇る気配がした。まだ使われていない新鮮な一日の到来に、無性に胸躍る自分がいた。
「金井のやつ、うまくやったかな」
「何それ、一体何のこと？」
真美は知っているはずだと思いながらも、そう聞かれて答えないわけにいかなかった。どちらにしてもこの時間には、金井は玲奈に想いを伝えているはずなのだから。
「そう。何となくそんな感じはしたんだけど……。でも、うまくいくといいわね」
そこにどれだけの気持ちが入っているかは疑問だったが、少なくとも真美が二人の結びつきを嫌っているようには思えなかった。ただ、善意の第三者として考えているに過ぎないようだった。
「ねえ、実は、相談したいことがあるんだけど」
でもその言葉を放った途端、うつむき加減にこちらを見る真美の表情が微妙に曇った。彼女の目の奥から訴えかけられる何かを見たような気がして僕は戸惑った。

「何だよ、言ってみなよ」
「こんなことを、俊介くんに言うのは変かもしれないけど……でも、俊介くんだから言うの」
言い方が実に遠回りだと思った。同時に、言いにくいことなんだと想像するのも容易だった。僕は辛抱強く次の言葉を待った。
「私、島本さんのことが好きなの」
ハンマーで叩かれたような衝撃が頭の中を駆けめぐり、次の瞬間、マグマのように噴出する疑問の渦に呑み込まれた。真美は僕のことを好きではなかったのか。何故、苦手だと言っていた島本を好きになったのか。どれくらいの時間が過ぎたのかわからなかったが、気がつくと脱力感と虚しさに覆われている自分がいた。そう、この時僕は初めて、自分が誰を好きなのかを理解したのだ。打ちひしがれるように思い知ったのだ。
「でも、何だかうまく言い出しにくくて」
「まあ、そうだよな」
それが精一杯だった。自分がどうしようもなくちっぽけな存在に思えた。全てを否定されたような気がした。始まったばかりの一日さえ恨めしかった。
「ごめんね、こんな話して。誰かに相談したかったの。俊介くんならわかってもらえると思って」
わかるわけもなかったし、わかりたくもなかった。今までの時間の流れは一体何だったのかと尋ねたかった。でも、おそらく既に遅かったのだろう。たとえ僕ががむしゃらに叫んだところで、何もかもはもう決まってしまっているのだから。

その夜も、僕は金井と店であてのない時間を過ごしていた。と言っても、彼の様子がいつもと違うことで二人の間に会話はほとんどなかった。彼はただ黙々と厨房を行き来し、レジを打ちながら客の応対をした。その痛々しい表情から何があったのかは容易に想像がついたので、僕はよほど励ましの言葉のひとつでもかけようかと思

ったが、早朝の出来事から自分自身の心境も穏やかではなかったのでそのまま時間をやり過ごした。端的に言って、人のことを気にかけている余裕などなかったのだ。

「見事にＫＯされました」

金井がようやく放った言葉は、午後十時を廻った店内に奇妙なトーンで響いた。既にシャッターは下ろされ、僕はレジの金を、彼はショーケースのサラダの数をチェックしていた。僕はかすかな罪悪感を抱きながらも気の利いた言葉をかけることができなかった。

「そうか、残念だったな」

「まあ、なかなかうまくいかないもんですね」

無理な笑顔を浮かべる金井に、僕はどうしても何かを言わなければいけないような気がしていた。少し頼りないバイトの、いや人生の先輩からの慰めの言葉を。でも、次の瞬間に口から出たのは、それとは正反対のフレーズだった。

「諦められるのか？」

「えっ」

「本当にそれでいいのか？　これからも同じバイト仲間として、今までと同じにやっていけるのか？」

まるで自分に言っているようだと思った。それは、今日一日僕自身が自問自答してきたことだった。これからも同じバイト仲間として、真美とうまくやっていけるのか。島本への想いを理解しながら、いやむしろそれを後押しするようなよき相談相手を演じていくのか。自分自身が壊れていくのを承知で。

「いいも悪いもないですよ。諦められるわけないじゃないですか。今が駄目だからって、これからも無理だって決めつけるほうがどうかしてますよ。毎日のように会ってるんだから、今にきっとチャンスはあります。たとえ男がいたってね。ほら、よく言うじゃないですか。人生一寸先は闇だって」

目から鱗が落ちた思いだった。ことわざの使い方はともかく、金井の言っていることはもっともだった。前向きで光のある考え方だ

った。僕は後輩から教えられたようなその言葉に圧倒されながらも、失敗を積み重ねてきた果てに行き着いた自分の後ろ向きな考え方を見透かされたような気がして恥ずかしかった。そう、これから先のことなんて誰にもわからないのだ。人の気持ちだって一寸先にはどうなるかわからない。真美の想いだって、気がついた時には自分に向けられているかもしれないのだ。

でも、僕のその考えは単なる妄想に過ぎなかった。目の前の現実は、圧倒的な力をもって僕と周囲を否応なく支配していった。何もかもが出来レースのようだった。あるいは、安っぽい筋書きのドラマのようでもあった。結局のところ、僕はそこで主役ではなくしがない脇役として、ただシナリオ通りに演じ続けるしかなかった。

Rest 2 ―Part. 3―

それは八月に入ったばかりの日曜日、つまりはカラオケの夜から四日後だった。午後九時を少し廻った頃から降り出した雨は、急速にその勢いを増していった。僕は、横殴りに吹き付ける水滴に濡れながらも外に置いてあったのぼりを店内に入れ、開け放しにしていた自動ドアのスイッチを入れた。程なくドアが閉まったことで雨音はかなり小さくなったが、逆にこもったような音が中で反響して何とも不気味だった。

「こりゃあ、ひどい雨だ。そう言えば、傘持ってこなかったな」

「ロッカーの脇に、忘れ物の傘がたくさんありますよ」

わずかの時間しか外に出ていなかったにもかかわらず、濡れ鼠のようになった僕の呟きに、洗い物をしていた島本が珍しく言葉を返してきた。今日初めてといっていい会話らしい会話に少し気をよくした僕は、その勢いのままに話を先に進めてみた。

「どう？　最近調子のほうは」

「どうって、別に普通ですけど」

「そう……。立ち入ったこと聞くようだけどさ、島本って、彼女とかいるの？」

その問いかけに、島本は洗い物をやめて手を拭くと、眼鏡の奥からこちらをじっと見つめてきた。しまったと思った。つい調子に乗って、余計なことを聞いてしまったようだった。僕は早くも後悔の念に苛まれた。冗談だよと質問を打ち消したかった。でも、そういう時に限ってうまく言葉が出てこなかった。島本の目に釘づけにされて動けなかった。だから、しばらく後に彼から放たれた意外な答えよりも、会話がうまく先に続いたことに心底安堵した。

「いますよ」

「へえ、同じ大学の子？」

「いえ、同じバイトの子です」

「えっ、それって」
「真美ですよ」
信じられなかった。島本が真美と付き合いだしたことより、彼が女の子を呼び捨てにしたことに驚いていた。今まで、バイトの女の子を名前ではなく苗字で呼んでいた島本が、至極当然のように真美を呼び捨てにしたのだ。そのギャップがたまらなかった。彼の人物像が根底から覆されたような気がした。
「いつからなんだ？」
でも島本は、もう僕の言葉を聞いていなかった。こちらに背を向けて、再び洗い物を始めていた。僕の問いかけは、店の厨房をしばらく彷徨った後で虚しく消えた。予想していたことではあったが、彼の口から正式に事実を聞いた今となっては、事態は決定的かつ絶望的だった。出来レースだろうが何だろうが勝敗は決着し、ドラマは既にクランクアップしていた。僕の役回りは真美のよき理解者、相談相手の男友達、あるいは先輩として固定された。もちろん、彼女を奪い取る筋書きも残されていたが、その役を演じるには僕はあまりにも役不足だった。と、少なくとも自分ではそう思い込んでいた。僕は諦念ともいうべき固定観念のもとに、そうして自らの手で肯定的な可能性を摘み取ってしまったのだ。

真美と河原のカフェに行ったのはその二日後だった。相変わらずの暑さに我慢しきれなかった僕らは、バイトからの帰り道で立ち寄り、夕立で濡れた雑草の上に並んで腰を下ろした。今日のオーダーはカルピスウォーターだった。
「白いキス、瞼で弾けた～」
「何だい、それ？」
「知らないの？　ときめきはカルピスウォーターのＣＭ」
「そんなのあったっけ？」
「全く、俊介くんて、案外何も知らないのね」
呆れたようなとぼけたような複雑な表情を浮かべながら、真美は

その「白いときめき」を一口飲んだ。彼女の喉が軽く動き、それとともに僕の心も少しときめいたような気がした。
「島本とうまくいったんだって？　よかったな」
「えっ、何で知ってるの？」
「一昨日聞いたんだ、島本から」
「そう」
「今や夏真っ盛り。これから二人で十分に楽しめるな」
「相変わらず変わったこと言うわね。そういうあなたにも、そろそろ真っ盛りの夏が来るんじゃない？」
　単なる言葉遊びに過ぎないと思った。売り言葉に買い言葉とは違うにしても、話の流れがもたらす言葉の綾でしかないはずだった。だから、その流れのままに僕は言葉を繰り出すだけだった。そこに真実など隠されているはずもなかった。
「どういう意味だよ？」
「ここだけの話だけど、潤子さん、俊介くんのことが好きみたいよ」
　ここの他で話してほしくない内容だったが、それにしても真美の放った言葉は僕を驚かせるのに十分だった。事実かどうかは別にしてもあまりに突飛だった。火のないところに煙が立たないように、僕と潤子との間にそんな火種など微塵もないはずだった。
「どうしてそういうことが言えるかな。もっとましな嘘をついてみろよ」
「じゃあ、本人に直接聞いてみればいいじゃない。嘘かどうかすぐにわかるわ」
　真美は少しふてくされているように思えた。カルピスウォーターを飲むスピードが上がったことからもそれは明らかだった。確かに、考えてみれば真美が僕に嘘をつく理由もメリットもなかった。真美と潤子の仲のよさからすれば、むしろ真美が潤子の援護射撃をしているとも考えられた。でも僕は、やはり信じることができなかった。何度も言うようにこれまでの僕と潤子との間には、そのきっかけのかけらもなかったのだから。

Rest 2 ―Part. 4―

とは言っても、そんなことを聞いてしまって潤子のことを意識しないわけもなく、本当にそうなのだろうかと、彼女と同じシフトに入った時には少なからず緊張した。何気ない会話をしていても、彼女の瞳の奥を覗き込んでしまうことも多かった。

「私の顔に何かついてますか？」

「いや、可愛い目してるなと思ってさ」

その夜も他愛ない会話の最中に潤子の目を見つめてしまった僕は、彼女に向けられている自分の意識を見透かされるのが怖くてとっさにそう繕った。言ってしまってからしまったと思ったが、怒るかと思ったその表情は意外にも柔らかかった。いや、むしろ気恥ずかしさを必死で堪えているようにも思えた。そして、彼女の気持ちの真意を試すような言葉を放った自分に罪の意識を感じた。

「ああ、そうだ。今日店が終わったら一緒に帰らないか？　自転車だろ？　とっておきの場所に案内するよ」

「ええ、でも……」

「そんなに時間はとらせないからさ」

戸惑い気味の潤子を、僕は強引に誘った。その場の気まずさを何とかしようとまたもや唐突に口から出た誘いだったが、もちろんそれだけではなかった。僕は彼女のことをもっと知りたかった。この間の真美の発言の真意もさることながら、素顔の彼女がどこにあるのか、その存在を確かめたかったのだ。

河原のカフェは今夜も蒸し暑かった。僕は自動販売機で潤子のための冷たいミルクティーと、自分のためのカルピスウォーターを買って、一足先に腰を下ろしていた彼女のもとに駆け寄った。

「ありがとうございます」

「どう？　なかなかの場所だろ？」

でも潤子は、あまり気に入っていないようだった。時折飛び交う虫に体をよじらせ、敷き詰められた雑草で服が汚れないかとしきりに気にしていたりと落ち着きのない素振りが続いた。僕は真美と異なるそんな仕草が妙に新鮮で、またもや潤子の横顔をじっと見つめてしまった。

「えっ、何ですか？」

「あっ、いや、そう言えばこの間のカラオケ楽しかったな。予想以上に歌がうまかったから驚いたよ」

「そうですか？　普通だと思うけど」

並んで座る僕らの間には微妙な空間が横たわっていた。人ひとりが座れるほど広くはなかったが、通り抜けられないほど狭くもなかった。その中途半端さが今の二人の心の距離をことさらに象徴していた。だから僕は、その距離を少しでも縮めようと、普段着の彼女が知りたくて言葉を投げかけた。

「学校やバイトがない日って、何やってるの？」

「何って、部屋の掃除をしたり、友達と買い物や遊びに行ったり……」

「彼氏とデートしたり？」

「今はいないですよ」

「じゃあ、前はいたんだ」

我ながら陳腐な受け答えだと思った。僕は、会話のセンスのなさと内容の不躾さが情けなくてカルピスウォーターを一気に飲んだ。今日はときめくどころかげんなりした。

普通ならここで会話がストップし、次の展開を考えるべきところだったが、しばらくの沈黙の後、潤子は静かに話し始めた。前に付き合っていた男の話を。

高校時代にサッカー部のマネージャーだった彼女は、同じ部の二つ上の先輩に憧れていた。キャプテンだったその男は学校中の女の子の憧れの的だったこともあり、最初のうちは叶わぬものと諦めていたが、夜も眠れないほどに募った想いに耐えかねて、ある日つい

に自分から告白した。
「高さ百メートルのところからバンジージャンプをするくらい緊張したの」
潤子は的確な表現でその時の想いを伝えてきた。清水の舞台から飛び降りる以上の緊迫感を想像した僕は、一女子高校生の勇敢な行動に尊敬の念を抱いた。
そして神様は、彼女に光を与えた。意外にもキャプテンは彼女の想いを受け入れ、やがて二人は付き合うようになった。
「最初のうちは、夢でも見てるみたいでした」
でも、その夢は最終的に残酷な現実となって彼女を覆い尽くしていった。彼が高校を卒業して大学に入った頃から状況は一変した。
「大学で好きな子ができたみたいで……。本当に、別れる時なんてあっけないもんです。まあ、よくある話ですけど」
潤子は無理して笑っているようだった。僕は何だか無性に哀しく、またやるせなくなった。健気な彼女が無性にいとおしくなった。カルピスウォーターを飲み切ったことも気にならないほどだった。
「似てるんです」
「えっ」
「あなたが、彼に似てるんです」
それは唐突な展開だった。切実な眼差しで訴えてくる潤子に、僕は正直なところ迷っていた。今や真美が言ったことは疑いようもない真実だった。彼女の想いを十分過ぎるほどに理解できた。でも、僕のほうにそれを受け入れるだけの用意がなかった。心のベクトルは未だに真美に向けられていた。ここで先に進めることがいいのかどうかの判断がつかなかった。
最終的には本能が勝っていた。反射神経といってもいい動きだった。いつの間にかその距離が縮まっていた僕らは、お互いの目の奥をじっと見つめていた。程なく潤子の目がゆっくりと閉じられたのを見届けた僕は、その十センチ下にある桃色の唇に吸い寄せられていった。そう、ここにもドラマが存在していたのだ。脇役には脇役

なりのシチュエーションが用意されているのだ。演じている自分たちが主役であることを意識すれば、誰がどういう役回りかはどうでもいいのだ。最終的にそれを決めるのはあくまで視聴者なのだから。

Rest 3 ―Part. 1―

僕らの付き合いは極めて自然だった。突き動かされるような激しい衝動もなかった。ちょうどそれは、春の陽だまりの中で森林浴を楽しんでいるようなものだった。安らぎが二人を真綿のように優しく包んでいた。潤子に対しては何の不安もなかった。むしろ、これほどまでにできた女の子は他にいないと思ったくらいだった。昔ながらの言葉で言えば、気立てがいいという表現がぴったりだった。不安は僕の内側に巧妙に隠されていた。それが表に出ることを恐れた僕は、とにかく必死で彼女と同じステップを踏むことを心がけた。いずれは破綻することを承知していながら、僕の心もとないダンスは、時の流れの中で辛うじてその体裁を保ち続けていた。

真美が花火をやろうと言い出したのは、八月も終わりにさしかかった残暑の厳しい夜だった。店の厨房で繰り広げられる二人の取りとめのない会話の中に、彼女の提案は唐突にもたらされた。日常の中に非日常が紛れ込んできた異物感に、僕は一瞬戸惑った。

「夏の思い出に、ねえ、やろうよ。私たち二人と、俊平と潤子と四人で」

真美の口から放たれた「俊平」という言葉に馴染めない自分がいた。バイト仲間の中で、島本のことを俊平と呼ぶのは、いや呼べるのは真美だけだった。当然といえば当然のことだったが、僕はそこに二人の親密な間柄を垣間見たようで居心地が悪かった。誰かに、お前は島本に嫉妬している、と言われても反論できなかっただろう。

「そうだな、まあいいんじゃないか」

「何よ、その気のない返事は。まあいいわ。じゃあ、明日の夜に決まりね。場所はいつもの河原で。俊介くんと潤子はバイトだから、私と俊平が、店が終わった頃にここに来るわ。それでいいわね」

「いつものカフェで花火なんて、ちょっと危ないんじゃないか？」

「何言ってるのよ。本当のカフェじゃないんだから」
至極もっともな意見だった。河原のカフェで花火をやることに、もとより異論はなかった。考えてみれば、島本の名前が俊平だったなんて今まで知らなかった。そう言えば俊介と俊平も結構似てるな、などと妙に感心しながら、僕は鼻歌交じりに雑巾がけをする真美の横顔を見ていた。その時ふと、彼女が手の届かない遠い場所に行ってしまったような寂しさを感じたが、そのことで僕は改めて自分自身の心のありかを再確認し、現状とのギャップに救いようのない絶望感を抱くばかりだった。

Rest 3 ―Part. 2―

折りしも八月最終日にあたるその日は、朝からしとしとと雨が降る最悪のコンディションだった。シフトに入った夕方になっても状況は一向に変わらなかったので、僕は心の中で早くも花火の中止を決定し、潤子にはあえてそのことを言わなかった。もともと真美の気まぐれから出たことだし、正直大したイベントではないと高を括っていたこともあった。だから、店を閉めようかという午後十時前に花火を抱えて現われた真美と島本の姿に、僕は驚いたというよりは戸惑いを隠せなかった。

「何だよ、中止じゃなかったのか？」

「どうしてよ？」

「だって、今日は朝から雨が降ってるし」

「もう上がってるわよ」

真美の言葉に真実味を感じなかった僕は、自分の目で確かめるために早足で店の外に出た。もっとも、あくまで店の立て看板の電気を消すついでだったのだが。

彼女の言うとおり、既に雨は上がっていた。さらにそのことで、むしろ夏の終わりとしては画期的までに涼しかった。

立て看板の電気を消し、シャッターを下ろしながら入り口の自動ドアのスイッチを切ると、厨房のほうから笑い声が響いてきた。でもそれは、微笑ましいというよりはむしろ寂しげだった。僕は、昨日真美が言っていた「夏の思い出」を肌で感じたような気がして、切ないようなやるせない想いを抱いた。

「花火のこと、どうして言ってくれなかったの？」

厨房に戻った僕に、さっそく潤子が噛み付いてきた。僕は曖昧な返事でごまかすと、まるで自分が誘ったかのようなハイテンションで他の三人を促した。「その前に早く店の片付けをしてよ」と、すかさず言い放った真美をその胸の片隅で感じながら。

雨が上がったばかりの河原のカフェは涼しく、水に濡れた草たちが風に揺れてかすかになびいていた。後ろに真美を乗せた島本を含めた三台の自転車で乗り付けた僕らは、自動販売機でそれぞれのジュースを買うと、いつもは座る緑の絨毯を横切ったその先に広がる小さな広場へと降りていった。十メートル四方の空間は、広場というよりはむしろ草の生えていない空間に過ぎなかったが、いずれにしても僕らはそこを占領するように陣取って真ん中に花火を置いた。

「じゃあ、さっそくやろうか？」

「いや、その前に乾杯だ」

早くも花火に火をつけそうな真美の機先を制すると、僕は手に持っていたカルピスウォーターを目の前に掲げた。つられて潤子と島本が呼応し、最後に真美が渋々同調した。

「じゃあ、一九九三年、僕らの夏の思い出に……」

「乾杯！」

おいしいところを持っていったのはやはり真美だった。僕はしてやられた表情を見せながらも他の二人に目をやった。潤子も、島本も僕と同じ思いのようで、呆れたような笑顔でお互いを見合っていた。

やがて誰からともなく花火をやり始めた。打ち上げ花火やロケット花火、ねずみ花火と進むにつれて、僕らは次第に自分自身を開放していった。自らの殻を破り捨てるかのように、いつも以上のハイテンションで騒ぎまくった。周囲の迷惑など眼中になかった。眩いばかりの光の向こうに潤子が見えた。その少し先では、島本が火をつけたたくさんのねずみ花火に飛び上がる真美がいた。何もかもがいつもと違っていた。それはさながら、さなぎから大空へ飛び立つ三匹の蝶のようだった。

そんな中で真美を目で追う自分がいた。ひときわ鮮烈な光を放つその姿に、いつの間にか僕の口から言葉がこぼれていた。

「まるで別人みたいだ」

「えっ、何のこと？」
気がつくと隣に真美がいた。瞬間移動したかのような突飛な状況に僕は一瞬たじろいだ。
「いや、『まるで別人の』っていう歌、何ていう曲だったかなと思ってさ」
「夏の日の１９９３、ｃｌａｓｓの曲じゃない」
「そうそう、それっていい歌だよな」
でも、真美はもう聞いていなかった。何を話しているのか、隣にいた潤子とくすくす笑い合っていた。そう、僕はただ続けて言いたかっただけなのだ。歌の最後にあるフレーズそのままに。「いきなり恋してしまったよ、夏の日の君に」と。

Rest 3 ―Part. 3―

どれくらいの時間が過ぎたのかわからなかった。イベントは既に最終段階を迎えていて、小さく輪を作った四人は、線香花火の放つ弱い光の中に今年の夏を詰め込もうと必死だった。

「ねえ、ちょっといい？」

初めのうち、それが誰の声なのかわからなかった。思わず周りを見回した拍子に、花火の先に辛うじてしがみついていた黄昏色の玉が音もなくこぼれ落ちた。

潤子の表情は物憂げだった。何かを伝えたい雰囲気に満ちていた。そして僕も、それが何なのか漠然とわかっていた。いや、最初から予期していたのだ。何もかもが、いつまでも続かないことを承知でここまで来たのだ。

僕は潤子に導かれるままに川べりまで歩いた。振り返った視界に、何か言いたそうに立ち上がる真美がいたが、それも少しずつ遠のいていった。

近くに水があるせいか、何度か気温が下がった気がした。つられて僕の心の温度まで下がったようだった。

「もう、やめない？」

「えっ？」

「恋人ごっこ。私もう耐えられないの」

かすかに光る川面を見ながら潤子は呟いた。こちらを向かないことで、彼女は精一杯のプライドを保とうとしていた。だから僕も、声を出して了承すべきだった。それが男としての、せめてもの潔い姿だと思ったからだ。

「どうしてだよ？　俺のどこがいけないんだ？」

でも僕は、最後まで優柔不断だった。思ってもいないことを、望んでもいないことを平気で、建前だけのやり取りに終始しようとしていた。痛いほどに突き刺さる潤子の優しさに応えられる人間では

なかった。僕はほとほと自分が嫌になり、そのまま目の前の川に飛び込んでしまえたらどんなに楽だろうと思った。

「そういうとこよ。自分に嘘をついて、見せかけだけの優しさで生きているようなところ。真美のことが好きなくせに、何となく惰性で私と付き合ってるところ」

悔しいはずだった。苦しいはずだったが、僕は逆に胸のつかえが取れたようにすっきりとしていた。むしろ、自分の問題点をストレートに指摘してくれた彼女に感謝したいくらいだった。

「それって最低よ。一見大人なようにも見えるけど、こっちは十分に傷つくわ……。あなただって苦しいでしょ？」

潤子の言うとおりだった。彼女に全てを見透かされていた。僕は改めて、女の子の感性の鋭さを思い知っていた。嘘をつくことの無意味さをひしひしと感じた。

「ねえ、何か言ってよ」

「俺、最初から全てをやり直すよ。今さら遅いかもしれないけど……。潤子には本当にすまなかったと思ってる。ごめんな。そして、いろいろとありがとう」

痺れを切らしてこちらを向いた潤子に、僕はありったけの誠意を込めてそう答えた。言い訳するにも言葉がなかったし、また彼女も聞きたいとは思わないだろう。大切なのは今、改めて自分の気持ちを確認したうえで、これ以上彼女を巻き込まないことだった。自分勝手なのは重々承知していたが、過去をやり直せない以上、未来を変えていくしか術がなかった。

もちろん僕は、潤子と付き合ったことを後悔していなかった。矛盾するようだが、彼女と知り合えたことで改めて真美への想いを感じたこともあったし、寄り添って歩いた短い時間の中で、僕は確実に男としての、人間としての成長を遂げているはずだった。そう、人と人との出会い、いや別れにさえ無駄なことなどないのだ。何故なら、一九九三年というこの夏に彼女たちと、彼らと出会えた奇跡は、僕の人生の中でのターニングポイントであり、確かな軌跡とし

て十年以上経った今でも心の中にくっきりと刻まれているのだから。

エピローグ　―Ｐａｒｔ．１―

三十歳をはるかに超えた僕は、床屋での安らかなひと時を終えて河原に来ていた。今までの憂さを晴らすかのように、思い切り刈り上げた後頭部を撫でる風が心地よかった。薄く雲がかかりだしたせいで、太陽の光もやや間接的になっていた。僕は土手に敷き詰められた雑草の上に腰を下ろすと、キャッチボールをする一組の親子の彼方で、悠久の時を刻むかのように流れる川面を見ていた。もちろん、かつてカフェがあった河原とは場所も時間も違っていたが、久しぶりにそんな景色を眺めていると、あの頃の自分と一体化するような不思議な気分だった。物憂げな夏の思い出が蘇ってくるようだった。

あの夏の小さな花火から程なくして、潤子とは別れた。恋人ごっこは僅か一ヶ月であっけなくその幕を下ろした。僕はその後も、真美への悶々とした想いを抱えながらバイト生活を続けた。秋の深まりに比例して、真美と島本との仲も深まっていった。それを否応なく見続けるのも辛かったが、冬の寒さとともに耐えることが自分に課せられた天命だと頑なに信じ続けることによって何とか数ヶ月をやり過ごした。春になって間もなく、大学を卒業した僕は店を離れ、仲間との連絡も次第になくなり、やがて途絶えた。

その後の三年という時の流れは、新しい社会生活という荒波にもまれたことで、光陰矢の如しの言葉そのままに過ぎ去っていったが、そんな秋にかかってきた一本の電話が僕を立ち止まらせ、一瞬にして過去の自分に引き戻らせた。金田からの、バイト仲間で久しぶりに会おうというその企画を契機として、僕は真美と再会した。既に島本と別れていた彼女は、もちろんそのせいだけではなかったが、やがて僕と付き合うようになった。僕らは、いや少なくとも僕は、空白の三年を埋めるように激しくお互いを求め合った。全てが夢のように幻想的で、おぞましいくらいにリアルだった。彼女の全てを

知ることはもとより望むところだったが、深く分け入ればそれだけ息苦しさも増した。でも、わかっていても留まることはできなかった。自分ではどうしようもない引力が働いていて、彼女から離れることなどできなかった。後戻りは不可能だった。

気がつくと、真美の体を通り過ぎていた。ちょうど皆既日食のように、真美の太陽と僕の地球はほんの一瞬しかひとつになれなかった。離れてしまうと、もはや相手を真正面から見られなくなっていた。猜疑心が日増しに心を覆い尽くし、やがてそれは虚しさを伴った諦念へと変わっていった。真美に会っても、突き動かされるような切ない衝動を感じなくなった。彼女が何を言っても、その瞳の奥に隠された想いを把握できなくなった。そう、全ては既に終わっていたのだ。僕は、真美のことを知り、その心を疑う苦しみから解放されると同時に、彼女と想いを共有するかけがえのない時間を永久に失った。

エピローグ　―Ｐａｒｔ．２―

茶緑色に染まったボールが足に当たる感触で目が覚めた。続いて、真正面から走り寄る子供の姿が目に飛び込んできた。僕はボールを手に取るとおもむろに立ち上がり、緩い放物線を描くイメージでそれを放った。思いの外遠くまで飛んでしまったことで子供を逆向きに走らせる羽目になったが、それが僕を先へ進ませるまたとない契機となった。三十メートルほど直進して立ち止まると、そこは少し前に子供たちが線香花火をしていた場所に他ならなかった。足元には、ピンクと灰色に染められた残骸が無造作に放置されていた。その瞬間、頭の中を閃光が走った。と同時に、数時間前に見えていたおぼろげな一本の線が、面となって急激な広がりを見せ始めた。それはまさに、点景という記憶の断片が無限の光景に変わった瞬間だった。

そうして時空を超えて結びついた河原のカフェは、ただ草の匂いをふんだんに含んだ柔らかい風に吹かれていた。夏の暑さも冬の寒さも感じなかった。僕はそこで一人カルピスウォーターを飲み、何本も何本も繰り返し線香花火をしていた。周囲には誰もいなかった。かつて心を通わせ合った四人の姿も、それどころかさっきまでいたはずの親子連れさえいなかった。遠くから聞こえるはずの車の走行音を始めとする、ありとあらゆる生活音も消えていた。

不思議なことに、線香花火は最後まで続かなかった。黄昏色の玉として結実する前に終わってしまった。何度やっても結果は同じだった。目から涙が溢れ出てくるにつれて、やるせない虚無感が体全体を覆い尽くしていった。そう、僕は絶望的に、そして宿命的に孤独だった。どれだけ泣き叫んで助けを求めても、手を差し伸べてくれる人間の存在はなかった。二十一世紀が始まったばかりの世界にあって、僕の周りだけが世紀末のように荒んでいた。

でも、僕にはわかっていた。この孤独から脱却するためには、と

にかく前に進まなければいけないということを。いつまでも過去の思い出に捉われ続けてはいけないということを。それがやるせなくも懐かしい、セピア色に染められたノスタルジックな世界であったとしても、一握りの、一瞬の勇気を振り絞ってそこから抜け出さなければいけないのだ。過去という陽だまりから、北風が吹きすさぶ未来へ歩き出さなければならないのだ。たとえ、下りのエスカレーターをひたすら上り続けるような苦しみに打ちひしがれても、そうすることで僕は新たな人間との新たな世界を発見し、さらには新たな人間となったかつての四人とも再会できるのだ。

僕にとっての河原はこれまでも、そしてこれからも、様々な人との出会いの場、お互いの貴重な時間を使って心の交流を図るカフェとして存在し続けるのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8205c/

Riverbed Cafe

2010年10月8日15時29分発行